h o s h i

n o

k o e

★

星の声

回想の足穂先生

萩原幸子

Sachiko Hagiwara

筑摩書房

h o s h i

n o

k o e

回想の

足穂先生

萩原幸子

Sachiko Hagiwara

筑摩書房

萩原幸子（はぎわら・さちこ）
一九二五年、東京に生まれる。一九四九年の春、二十三歳のときに、戸塚グランド坂下の古本屋で、偶然、稲垣足穂と出会い『キタ・マキニカリス』を贈られる。以後、読者となる。一九六九年、『稲垣足穂大全』（全6巻・現代思潮社）の編集を手伝う。二〇〇〇年、『稲垣足穂全集』（全13巻・筑摩書房）を編集。

星の声——回想の足穂先生
二〇〇二年六月十日　第一刷発行

著者　萩原幸子
発行者　菊池明郎
装幀　吉田篤弘・吉田浩美［クラフト・エヴィング商會］
印刷　精興社
製本　牧製本
発行所　筑摩書房
東京都台東区蔵前二－五－三
〒一一一－八七五五　振替・〇〇一六〇－八－四一二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
さいたま市櫛引町二－六〇四　筑摩書房サービスセンター
〒三三一－八五〇七　TEL・〇四八－六五一－〇〇五三

© S. Hagiwara 2002 Printed in Japan
ISBN4-480-82348-4 C0095

出会い

飯田橋のほうから走って来る早稲田行き都電の終点が、戸塚グランド坂下で、坂とは反対側、折返しの停留所の前に間口の狭い小さな古本屋があった。

昭和二十四年の春、晴れた風の強い日、お昼過ぎに私はその古本屋へ五、六冊の本を売りに行った。

前年まで勤めていた役所を辞めて、洋裁を仕事にしようと思って研究所へ通いはじめていたころ、二十三歳であった。

古本屋の主人が私の持って行った本を品定めしているあいだ、棚の本を眺めてい

ると、そこへ二人連れの男性が入ってきた。先立った人が一升壜を下げていて、振り向くと、主人の脇に立ったその人がこちらを見た。面長な顔の表情が柔らかく、この時のその人は若く見えた。メガネはなく、下着の上に直(じか)に薄茶色の背広の上着を着ている。主人とは親しいらしく、それから手許の台の上に並んでいる本を覗いて、手短かに、

「その中ではこれだな」

と一冊を指し、あとはどうでもよい本とたちまち的確に評する。その言い方があっけなくて、急に笑ってしまいたくなるような親しみのある空気がその場に流れた。

すると、その人はそこの台の上に置いてあった白い本を手に取り、つかつかと私に近づきながら、

「若い人はこういう本を読まなくてはいけない。僕は稲垣足穂です。これは僕が書いた本です」

扉のページをひらいて見せながら、いくらか誇らしげにそう言う。私は稲垣足穂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

という名を知らなかったし、突然で返事も出来ないでいると、
「いまここにないけれど、この本をあなたにあげます」
お酒が入っている。でも無邪気に明るく、連れの人も主人も声を立てて笑い出した。
狭い店の中に、その人をかこむ雰囲気が弾んだけれど、私は笑っている男性の中にいるのが急に恥ずかしくなってしまい、逃げるように店を出てしまった。江戸川橋のほうへ二、三歩行きかけると、その人もあとから来て並んで歩き出した。
その時、突然、
「ブルーン　ブルーン　ブル……」
力をこめて唇をふるわせ、円を描くように右手を大きくグルグル廻す。なにごとか、とびっくりした。これが、先生得意の飛行機の爆音の口真似と知ったのは、十年以上も経ってからなのだ。
ふと黙ったあと、まじめな顔になり、口ごもるような早口で若い頃からの自己紹

介らしきことを語る。ほとんど聞き取れずよくわからなかった。不愛想に黙っていると、急に語調が烈しくなって、

「男も女もみんな嫌いだ！　女の人がいちばん美しいのはカトリックの尼さんです。キリストの花嫁になって下さい」

私の返事など待ってはいず、矢継ぎ早やに言葉が続く。その人から発散する異常なある力があった。周囲の生暖かい空気を切って払い除け、相手にかまわず心の奥までさらすゆさぶるような気迫。気を呑まれて、眉根をよせたずっと年上のようにも見えるやや険しい横顔を見詰めた。このような人はいない、苛烈な痛ましい、おそらくは優れた人がむき出しに世に紛れ、今、ここにいるのか。

左手の小路に入ると、焼跡の空地がひろがって遠くの桃の木に花が咲き、畠の間の道端に小さな青い花がむらがって咲いていた。駒塚橋の上まで来て立止った。

向き合って見た眼の白目に赤いすじが走り、飛び出すように大きく烈しい。瞬間、その目を見たけれど見続けられなかった。

「では」

と言うと、急にうしろを向き、いま来た道を走って行く。何故かいそいで駈けて行く下駄ばきのうしろ姿を橋の上から見送った。

銀杏の大木が枝をひろげている脇の、胸突坂（むなつきざか）の階段を登りながら、どうしてか心がふさぎ悲しかった。世間はああいう人を傷つけるのではないか、その不幸を感じるからだろうか。坂の中ほどで振り返ると、若芽の萌え出た銀杏の梢の下は陽光の中に静まって、その人の姿はもう見えなかった。

何日か経って古本屋へ行くと、

「稲垣先生から預りました」

と、主人は新しい白い本を差し出した。

思いがけなかった。圧倒的な疾風の如く走り去り、あとでは私のことなどおぼえてはいられないだろう、あのひとときは忘れ去られてしまったような気がしていた。

いただいてよいのかしら……

手にしたその本は、アイボリーホワイトの地に雄鶏の絵と横文字を配し、装幀色調のハイカラーな本。背文字の書名は『キタ・マキニカリス』。

「お礼に行きたいけれど、何を持って行ったらいいでしょうか」

と訊ねると、主人は電車通りのほうへ眼をやり、口許を少しゆがめて笑いながら、

「先生はお金のあるときは、バラまくように使ってしまうから……煙草ふたつくらい持って行ったらいいでしょう」

と言って、グランド坂上の真盛ホテルという宿屋の場所を教えてくれた。

読みはじめた『キタ・マキニカリス』は、めずらしい不思議な本であった。もっとも私がこの本に独自な魅力、それは、透明な乾いた玩具、空間に浮かぶ造られた世界、とでも言うような、を感じるようになったのは、ずっと後年になるけれども。その時は、若々しい幻想的な雰囲気が好きになった。

著者である先日会った人と、そのきれいな感じが結びつかなかった。それぞれの

作品の末尾に発表の年が録されてあった。若い頃このような作を書いた人の上に、苛酷な歳月が過ぎたのかもしれない。あまりにも違う、と思った。

数日後、静かな夜のグランド坂を登って坂上の宿へ行った。

三和土に立っていたあいだ私はどこを見ていたのだろう。気がつくと、いつの間にか明るい玄関と暗い廊下との境目に、音もなく稲垣先生が立っていた。暗い廊下を背景にして、玄関の明りに浮かび出たまぼろし。幽明の境に立つかのようにひっそりと佇む姿から何かがゆらめき立ち昇る。地上の人とは思えなかった。すくむようなおそれと静寂の気配を感じ、私は思わずしりぞいていた。

――いまも、どこか遠い国の美術館か寺院の暗い隅に、額縁の中の闇を背にして、サン・タルホは静かに立っているのではないだろうか。

玄関を通ってすぐ左側の部屋に座った先生は、気難しく不機嫌に近かった。『キ

タ・マキニカリス』をいただいたお礼を言うと、
「お気に入ったのがありましたか」
その言い方がそっけなく、私の返事に関心を持っていない、と思えて困っていると、
「この宿屋に借金が溜っていて部屋を探しています」
おじゃましてよいのかしら、と私は固くなってしまった。何も言えないでいると、先生は改まった風に話し出した。それからしばらくの間続いた話は、「『要理』と『パンセ』と『死に至る病』とのアマルガム」であったような気がしている。
ほとんどわからなかった。何を言われたのかよくおぼえていないのは、キリスト教に関心を持っていなかった頭と心に受け止められなかったからなのだろう。ただ烈しく続く隙間のない言葉に押されていた。
「あなたがもしも大怪我をしたり、病気になったりしたらどうするんです」
キリスト教を知らないのは、不幸だ、怠慢だと、教会へ行くことを勧められる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間の傲慢さを何回も批難されたのが耳に残っているけれど、繰返し言われる罪という言葉に、なぜそのように責められなければならないのかと、重苦しい圧迫感が、私に向かって押し寄せてくるように思えた。

そして、先生は身辺に現われるという幻覚について語る。

襖の間から、また窓に張り付き部屋の中を窺うもの……

小山のように盛り上がっていたのが崩れて、八方に走る尻尾の長い黒いもの……

天井から「イナガキ！」と呼ぶ声。

「そういう時机の上の祈禱書を取ろうとして……」

手さぐりつかみ取る手つきをする。

電灯の光の届かない背後の暗い部屋の隅に、何者かの気配がする。息詰まるような寂寥を感じ怖かった。

それに、辛いさまを突き離した言葉にして表わす力。このような人がひとりで、焼跡の東京で、どのように暮していたのだろうか、煙草に火を点ける先生の指先が

ブルブルとふるえていた。

お部屋に長い時間座っていたような気がしていたけれど、そうでもなかったのだろう。横の小路に面した窓から古本屋の主人が顔を出し、それから三人で、グランド坂下の通りを渡った先の横町にあるコーヒー屋へ行った。

店へ入る時、入口の戸の前で先生は立止り、うしろにいる私のほうを向き、

「教会へ行って下さい」

と、小声で言った。くしゃくしゃに陰った目と眉のあたり、苦悩にひしがれたような顔。でもその表情と声音には、何かこの世ならぬやさしさが感じられて、灯影を受けて立つ先生は、巷のもの陰に佇む聖者を思わせた。

店の縁台に腰かけて、白い割烹着の小母さんが淹れてくれたコーヒーを飲んでから、家へ帰る私を牛込柳町の停留所まで二人で送って下さった。

人けのない広い道路の両側はまだ焼跡の瓦礫が残っていて、街灯も少なく夜道は暗かった。離れて一人、曇っている空を見上げていた先生が、足早にこちらに近づ

くなり、上体をかしげ、空に向って高く左手を上げた。
「こうして手を伸ばして、絞って、ピストルを撃つと、一面の星条旗の星空になるんです」
『キタ・マキニカリス』の中にある「星を造る人」のシクハード氏だ。あの俄雨(にわかあめ)の降る夜空を、米国星条旗(スターズバングルドバナー)の星空に変えてしまう術を演じる先生。
でも、私はまだお部屋でお話を聞いていた時の気持のままでいたし、それに歩いている先生は、暗い影のような寂しさを漂わせていた。急に焼跡の夜道で星を造る人になってみせる先生の気分の変化に、私はぎこちなく戸惑ってしまった。
すると、
「あなたは何の花が好きですか」
この質問にもおどろいた。気恥ずかしさを感じたのをおぼえている。戦時中このかた、周囲に何の花が好きか、というような話をする気風が無くなっていたからなのだろう。それでも先生の気分についてゆけず、黙っている自分が堅苦しく思えた。

「さあ……、先生のお好きな花は？」
「僕は矢車草が好きです」
マッチを擦る音がして、ポッと赤い火に横顔が浮かぶ。
さっきまでの緊張感がいくらか和らぎ、暗い夜道に煙草のけむりが流れた。

行方しれず

その日、お宿の部屋にいた時、横の小路に面した窓を指して、
「この窓からまた訪ねていらっしゃい」
と、先生が言われたので、その後二回ほど真盛ホテルの横の細い道に入ってみた。窓を叩く勇気は無かったけれども、部屋の中に人の気配は無いようだったし、夕方になっても灯の点らない窓は佗しかった。
坂下のコーヒー屋の小母さんは、
「先日、酒は無いか、って来られたけれど……あの先生はイタイタしいわね」

宿の主人は怒っているような口調で、
「帰って来ません」
と言った。
先生はいなくなってしまったのだ。「これ以上は戸塚にとどまってはおられず……」と「東京遁走曲」の中に書かれている頃であった。
古本屋の主人はある日、
「先生は富山にいます」
と言って、差し支えがあるという部分をかくして、稲垣先生からの葉書を見せてくれた。
新緑が色あざやかな風光のよいところ、とある差し出し地は、東礪波郡南山田村。都落ちされたとは知らず、旅先からのお便りと思った。先生の窮状を私は察していなかったのだ。「そんなことどうでもいい」という風な強い感じがあったけれど、部屋代が溜まっている、と聞いていたのだから、知らないはずは無い。気が廻らな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com